

2022年2月21日

令和4年度(2022年実施)試験「英語(リーディング)」について

1. はじめに

昨年度初めて実施された大学入学共通テスト(以下、共通テスト)のリーディングは、それまでのセンター試験とは出題形式が大きく異なり、発音・アクセント問題・文法問題・語句整序問題が廃止され全ての大問が読解問題となった。2年目となる今年度のリーディングは、昨年度と比較すると設問数が1問減り、マーク数が1問増えるなど僅かな増減はあったものの、大問数や配点は変化なく、概ね昨年度の出題形式を踏襲したものだといえる。変更点としては、全体的に図表が若干減った一方、語数は昨年度より500語程度増え、依然として読み解く情報量は多かった。それでも平均点が僅かに上昇したのは、2年目の共通テストということで受験生がある程度の対策を練ってきたことも要因としてあるのではないかと考える。

	大問数	設問数	マーク数	総語数	平均点
2022 共通テスト(本試験)	6	37	48	約6000語	61.80
2021 共通テスト(第1日程)	6	38	47	約5500語	58.80
2020 センター試験(本試験)	6	46	54	約4300語	58.15 (100点満点換算)

2. ポイント解説

(1) 主な大問ごとの昨年度との比較

・第1問A

昨年度は携帯端末でのメッセージのやり取りが出題されたが、今年度は写真とそれに付随した説明が4つ並ぶ形式に変更され、その中から共通する点を問う問題が出題された。

・第2問A

昨年度は2つの資料(バンドコンテストの結果表とその評価)を読み取り、情報を照らし合わせる必要があったが、今年度は図書館の利用案内という1つの資料からのみの読み取りとなった。しかし図書館の階数や本の貸し出し数など、数字に関する問題が新たに出題された。また、昨年度は **opinion** (意見) を選ぶ問題と **fact** (事実) を選ぶ問題が出題されたが、今年度は **fact** を選ぶ問題のみが出題された。

・第2問B

昨年度は **opinion** と **fact** を選ぶ問題が出題されたが、今年度はその形式の出題はなかった。しかし、数値を比較する問題や、意見の要約として適したものを問う問題、記事のタイトルを問う問題など、昨年度にはない傾向の問題が出題された。

・第3問 A

昨年度同様、文章と図の2つの資料を読み取る問題が出題されたが、昨年度のような計算を伴う問題は出題されなかった。しかし新たに筆者の心情を問う問題が出題された。

・第6問 B

今年度は一般的な読解問題ではなく、記事を基にまとめたポスターの空所を埋める形式となった。

(2) イギリス英語の使用について

今年度も昨年度同様、いくつかの大問においてイギリス英語特有の表現が用いられていた。

第2問 A ground floor, first floor, second floor (順に1階、2階、3階)

第2問 B organise (米表記: organize), flat (米表記では普通 apartment)

第3問 A learnt (米表記: learned)

第3問 B realise (米表記: realize), 4.30 am (時刻の表記)

3. まとめ

今年度の共通テストリーディングの評価できる点としては、米英二種類の英語が使用されただけにとどまらず、国や文化の多様性も表れていたことがあげられる。英語については、昨年度に引き続きイギリス英語も採用され、国や文化については、昨年度はアメリカとイギリスの2国が扱われていたが、今年度は第1問 A ではブラジルの果物、第3問 A ではイギリス人から見る日本文化、第6問 A ではユダヤ教やキリスト教、中国の文化などが登場し、多様な文化がテーマとして扱われた。この2つは、英語を通じて異文化について理解を深めることや、様々な英語が国際的に広く使用されている実態にも配慮するという学習指導要領の目的が反映されているのではないかと考える。

しかし全体をみると、試験時間(80分)に対して総語数が多く、この時間内に解ききるには情報を取捨選択する必要があった。昨年度のリーディングにも言えることだが、英語力というよりも、「多くの文章や図などの情報から、特定の情報を検索する能力」が問われている印象が強い。この力をつけるために答えに関係のある箇所を素早く見つけ出す対策が練られ、英文全体の趣旨の理解が疎かになってしまうことが懸念される。

大学入試センターは、共通テストの問題作成について「思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」と述べている。さらに英語の作成方針については、「「読む」「聞く」の中で外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識が活用できるかを評価するため、発音、アクセント、語句整序などを単独では問わない」としている。その背景には、「現実に英語を使う場面で語句整序をすることはなく、また仮に文法問題で高得点が取れたとしても、必ずしも実際に英語を活用する能力が高いわけではない」という考えがあるようだ。しかし、リスニングやリーディングはもちろんのこと、英語

を書いたり話したりするには文法の理解は欠かせない。このことから、長文読解問題について、その内容理解を問う問題だけではなく、例えばその中で文法や文構造の理解を問う問題が出題されてもよいのではないかと考える。

この2年間の英語共通テストは、書く力や話す力を加えた英語4技能を測る英語民間試験を導入することを前提として、聞く力（リスニング）と読む力（リーディング）に焦点を置き作成されたものと思われる。しかし2019年には英語民間試験の導入は見送られ、さらに昨年にはその導入は断念された。今後の共通テストには、現行のような「実用的な英語を重視するあまり、結果的に情報処理能力ばかりが必要とされるような問題」よりも、高校までの学習で得た知識や理解などを問う総合的な英語力が求められる問題の出題が検討されることを期待する。来年度以降どのような出題がなされるか、動向を注視したい。

<参考資料>

- ・「令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針 第1 問題作成の基本的な考え方」大学入試センターホームページ
- ・「令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針 別添 出題教科・科目の問題作成の方針 (6) 外国語 英語」大学入試センターホームページ
- ・「平成21年改訂高等学校学習指導要領解説」文部科学省ホームページ